

戦後日本における異質なスポーツ選手に関する 言説と受容

—1990 年代以降の「混血」「外国人」「帰化」スポーツ選手を
中心に—

LU YUNQIN

2020 年、ジョージ・フロイド事件を発端とし、黒人に対する不平等な取り扱いへ抗議する運動「Black Lives Matter」は拡大した。そして、新型コロナウイルス感染症の国際的な蔓延によってアジア系への人種差別の問題や暴力も深刻な状況になった。特に欧米において、人種差別の問題は希少な話題ではなく、すでに熱い関心を集めている。それに対して日本における人種問題への認識はまだ十分とはいえない。人種問題への意識の不足は、近年急速な広がりを見せている日本社会の排外主義感情・嫌韓反中感情に影響を及ぼした。在日韓国・朝鮮人選手をはじめ、グローバル化とナショナリズムなものとの間で揺らぐ混血選手、外国人選手、帰化選手など、日本スポーツ界におけるある特定の人種・民族・出身地に対する閉鎖的・排他的なナショナリズムと排外主義に関して解明すべき多くの論点も残されている。

そこで、本研究では、戦後復興期から高度経済成長期、低成長期を経て現在までの日本における混血、在日韓国・朝鮮人などの実態についての歴史変遷を踏まえ、異質なスポーツ選手が日本社会にて「発見」されるに至るプロセスを歴史社会学的に分析するとともに、異質なスポーツ選手をめぐる多角的な分析を通して戦後の日本社会の特質を明らかにすることを目的とする。

本研究は、混血・外国人・帰化選手に関する言説の分析を通して日本社会の特質を検討するために、社会の歴史の実態への考察に基づき、主に 1990 年以降の混血・外国人・帰化のスポーツ選手を主要な対象として以下のように分析を行う。

①厚生労働省、文部科学省などの公的機関の実態調査や行政資料を調べることで、混血や在日韓国・朝鮮人などの存在や実態を明らかにする。

②戦後初期から時系列的に、リベラルな傾向が強い朝日新聞と保守的な傾向が強い産経新聞、

二つの全国紙を中心に、これらの選手が誕生するプロセスおよびそこに浮かびあがる言説を分析する。また、広告・雑誌・主要ウェブサイト・映画などで、選手にまつわたることがどう扱われたのかを考察する。それを通じ、異質なスポーツ選手とメディアの関係性、および彼らが日本社会でどのように位置付けられ、受け止められてきたのかを時代的特徴と合わせて検討して明らかにする。

③混血・外国人・帰化選手の存在は、日本国民のナショナルな意識にどのような影響を残したのか、どのような社会問題への関心を喚起したのかを考察する。

第1章では、「人種」、「民族」概念の定義を検討し、日本の単一民族神話の二重の意味および民族論定着の過程を明らかにする。日本の民族論は歴史と社会の変遷によって変化していた。植民地を拡張するために混合民族論を提唱した時期があるが、植民地を喪失した後、単一民族の平和国家という主張が台頭してきた。しかし、1970年代に入ると、国際社会における日本の位置の変化により、「日本人」が海外諸国にどう見られているかという自意識が強くなったため、単一民族神話の支配は一層強化した。結果として、単一民族神話の定着は、現在日本社会におけるマイノリティや外国人労働者への差別の根源となった。

続いて第2章では、「混血」・「ハーフ」の定義と実態を明確し、混血の歴史的発展、または時代によって彼らに関するイメージの変遷を明らかにする。戦後、日本人・外国人をいう二分法が正当化され、占領期に出生した混血児は実に不可視化された。高度経済成長期に入ると、白人に対する憧れや羨望のイメージが醸成していった。混血児もその影響で「白人崇拜」の対象として積極的に商品化された。1990年代に入ると、日本における在留外国人の人数が増加し、ルーツも多様化していった。結果として、混血に関するイメージも多様化してゆき、以前日本社会において無化され続けてきた人種差別や偏見という問題も可視化されてきた。

第1章と第2章で検討した内容に踏まえ、第3章では、戦後初期から1990年代まで登場した力道山、渡部絵美、カシアス内藤とアジャ・cong 4人の事例から、時代の特徴に応じつつ1990年代までの混血・在日韓国・朝鮮人のスポーツ選手に関する言説を分析する。それらの言説から、対米・対韓ナショナリズム、ジェンダー化、商品化された女性ハーフへのイメージ、黒人系ハーフへの差別や偏見などが把握できる。

続く第4章では、1990年代以降、スポーツ種目や選手が持つルーツを基準に、時代の特徴に応じながら数人の混血・外国人・帰化のスポーツ選手に関する言説を分析する。1990年代以降の混血・外国人・帰化選手に関する言説は多様化、複雑化していく。その中で、メディアが混血・外国人・帰化選手を取り上げる際、いずれも「日本人の心」や「日本人らしさ」を強調することは最も代表的な特徴である。

そして第5章では、近年の異質なスポーツ選手をめぐるどのような社会問題への議論があるのか、日本人はこれらの問題への考えおよび選手に対する受容を検討する。混血・外国人・帰化選手

の報道が増加して多様な言説を示したが、異質なスポーツ選手への疑問視、差別的な発言などが日本人の人種問題への考えの欠如および民族意識の偏狭さを示唆している。だが、インターネットの発達によって選手自ら発信することも増加し、世界に注目された選手を頻繁に報道するため、社会問題に対する議論も高まっていく。

最後に、本稿の結論をまとめたうえで、今後の課題を示唆する。